

や農民の力を広く結集して河を拓き道や橋をつくり、池、溝、樋などを開いて農業を起した。農民は喜び、秋になって稻が実ると稻束を積んで豊作を祝い、人々はこの地を稻穫の郷となえたと謂われる。行基のこの事業が達成される頃、あたかも政府は

## 山梨医専の空襲—忘れられた遺体—

柿 島 弁 隆

かつて戦時下において、甲府に山梨医学専門学校（山梨医専）が、引き続き山梨女子医学専門学校（山梨女子医専）が設置されました。

当時の医専希望者は非常に多く、倍率も高く、入学は至難のわざでした。両校とも校舎は、青沼にあつた甲府商業学校があつました。

昭和二〇年七月六日の夜、甲府は空襲に見舞われ、山梨医専の校舎も焼失いたしました。山梨医専は二回の入学生がありましたが、山梨女子医専は甲府空襲の前日七月五日が、第一回目の入学式であつたため、一日も学ばずして校舎を失い、女性教師一

三世一身法を定めるなどして、治水、開田政策を積極的に進めていたので、おそらく行基は甲斐国稻穫郷一帯を中央政府の政策に相応するような方向で実り豊かな土地にしていったと思われる。

（市史編さん調査協力員）

当山に埋骨された理由は、父が戦時に甲府商業学校で教鞭をとつていたことがあつたためと思われます。

その後昭和二六年一二月一日、山梨県知事天野久氏によつて永代供養のお願いがあり、志納金が納められております。

この話を聞くきっかけとなつたのは、何年か前、それまでずっと寺の年中行事として供養をしてきたこの無縁墓地周辺の整地中に、多数のお骨が出てきたことからで、それまで私が思つていていた以上に広い無縁墓地について、父母から私なりにきいていた話の確認のため、寺の古い書類を調べた結果わかつたことです。そのためこの墓地周辺は手をつけず、そのまま現在にいたつています。

山梨医専、同女子医専ともに、昭和二二年三月をもつて廃校となつて、在籍していた学生達は、希望により東大附属医専、東京女子医専、名古屋医専に転入した方々もおり、医学をはじめ、それぞれの分野で活躍されております。

戦後四〇年県民待望の山梨医科大学と附属病院が設置され、県民のために非常に役立つてゐる現在、空襲による犠牲者の名簿

にものらず、すでに世の中から忘れ去られている、このような方々がいたということをここに記して、せめて仏の追善供養にしたいと筆をとりました。

合掌

(仏国寺住職=投稿=)

戦時中の医師不足の対策として各地に設けられた医学専門学校で、山梨県では青沼にあった旧甲府商業学校廃校舎に山梨医学

### ※山梨医学専門学校

専門学校として昭和一九年四月一日に開校、少しおくれ山梨女子医学専門学校が設置された。入学式は、甲府空襲の前日であった。山梨医学専門学校附属医院には、県病院と外分院二ヶ所があてられていた。甲府空襲のため校舎を焼失、やむなく他の施設を使用して授業をつけたが、関係者の努力の甲斐なく復興もできないまま、文部省の方針で両校とも昭和二三年に廃校となる。

(事務局)

## 千塚の咳婆地蔵とあげ仏さん

窪田 勘

昭和一七年、市に合併された当時の千塚村について、「山梨県町村合併誌」(昭和四六年刊)には次のようにある。

### 千塚村

二年町村制施行に当たり、同年六月千代田村は分離して独立、翌七月塩部村と合併、大宮村との組合は從来のままで、千塚村二カ村組合となつた。

本村は旧北山筋に属する千塚・塩部両村の地である。明治五年一月山梨郡第六区に編入せられ、同九年十月山梨県第四区に改編された。明治十三年三月大宮村と連合し、同十八年六月には更に千代田村をも加えて三村連合となつた。明治廿

村は、それぞれ山宮町・羽黒町・湯村町と改称された。  
その後、地方自治法第二百六十条第一項にもとづいて、各地で新町名とその区域が定められたが、千塚町についていえば、昭和四年および四五年、その町名と区域とは、千塚一丁目から千塚五丁目と定められ、現在に至っている。  
さて、その千塚四丁目に、現在は咳婆地蔵と呼ばれる地蔵が祀られている。千塚四ツ角から北へ約三百メートル、「攀桂寺」入口」とある標識のところを左折して數十メートル、道の右側の古びた小屋に、それは安置されている。

この地蔵については、古く「西山梨郡志」(大正二五年刊)に、

千塚村橋場の四つ辻を一町程南に入ると西側に高さ尺余、周囲八尺位の石が地上に立つてゐる。何時の代からか咳婆さんと呼ばれて、咳殊に百日咳に苦しむ者は、全治した時飴を奉納する事を約して祈願すれば効驗著しいと謂はれてゐる。

尚お茶好き婆さんとも謂ひ、里人はよく茶をあげてゐる。  
とあるが、往時をよく知つてゐる窪田はる